

通わせたる如き」瓊貝、春雲の匂いたつ肌の色を、「文姫、小櫻」いずれの「上臈」に写しかえるにも、天香一人の力では語り得ないことは、明らかである。

まして、いわんや、郷笛（横笛）簫笛（縦笛）玄琴（胡弓であって、伽倻琴ではない）の切々たる響きの訴えるところを解するにおいておや。

引籠中とはいえ、硬軟両記事に通達した主筆でさえ、投げ出す翻案小説を、当時の読者大方が、受けいれられる筈もなく、後篇に「引続き書くことあるべし」のお断りは、紙面上では反古（ほご）になったが、『夢幻』前編に引き続き『統胡砂』の掲載によって、朝日小説欄側としては、約を果しているといえよう。更に続いて『後篇』の連載はすでに『統胡砂』執筆中に書きためられたものともみられる。

以上、誠に恣意的に『夢幻』作者の『文体』をあげつらい、私見を述べたて、「比較文学の方法」を学問的のゆがめたそしりは免れないが、『胡砂吹く風』考Ⅱによって、桃水痴史作に於

ける、具体例を駆使し、この責めをふさぎたい。

一九八四、九月末 摺 筆

本稿は和田繁二郎博士古稀記念「伝統と現代」所載、拙稿「桃水痴史作『朝鮮小説胡砂吹く風考』」に続く「半井桃水研究Ⅱ」に当るものである。

注① 明27年9月より、前篇25回、東京朝日連載。後篇は明年より、28回全右。

② 水戸清平著、「知られざる文学」（昭35・12、水戸市川又書店刊）

③ 柳田泉著「明治初期翻訳文学の研究」（昭36年9月、春秋社刊）

④ 青柳南冥（綱太郎）訳、（大3、朝鮮文学研究会刊）

⑤ 半井列著、「伝教大師」（大10・2、滋賀県阪本比叡山延暦寺、伝教大師千百年御遠忌事務局発行）

⑥ 祖父半井文中は典医ながら、お馬廻り役格八十石取り。水戸清平著、「知られざる文学」所収、「夢幻」考

⑦ つかだ・みつえ 京都女子大学名誉教授

『是楽物語』の構造

「かな草子」は、文芸史上でまた確固とした独自の位置をしめているわけではない。しかし、「かな草子」はたんに「浮世草子」への過渡的文芸でもなければ、中世小説のエピゴーネンでもない。したがって、「かな草子」を発達史的に、現代から逆行し評価することはできないし、「かな草子」の成立や構造を論じる場合にも、その主体概念や方法概念をどう把握するかということが課題となる。たとえば『竹斎』も、作者の長編的意図に関わらず、あまりに「多くの部分で分断され、物語としての統一性」を欠いていたし、「緊密性の乏しい構成」と「遊離性」^①をもっていた。この夾雑性・複合性は『竹斎』だけではなく、他の「かな草子」も共有している。しかし、このことだけをもって、「かな草子」の主体概念の未熟さや創作方法の拙劣さを言うことはできない。逆に言うなら、そこに「かな草子」の特色の一つがある。

前 芝 憲 一

『是楽物語』もまたこの例外ではない。

『是楽物語』は上中下の三巻から成っている。その構成も、そのまま次の三つに分けられる。

(一) 「友名」「是楽」主従の設定。「友名」の恋愛譚の発端と名所めぐり。

(二) 有馬での「是楽」の長語り。

(三) 「友名」「きさ」の恋愛譚。

しかし、この作品は、ストーリーだけを見るなら、野田寿雄氏も指摘されるように、「雑然という感を免れない」もので、「近世初頭の小説形態の混乱ぶりを象徴」^②している。その「雑然」「混乱ぶり」の典型が中巻である。ここでは、有馬の「名所旧跡」は、はじめから「鞍がたき」「などたつねしも、のちにはしやう事なくて」と捨象され、「あひ物がたり」のついでに出された「驪山の温泉」の故事を連想の媒介として、「聞ある人、とてもの次に、かの楊貴妃馬嵬とやらんにて露ときえ給ひし昔の秋、はしめよかり給へといへは、是楽長くしくもかたりたり」

と「楊貴妃」物語がまず冗長に展開される。また、このあと「きく人」な世の一治一乱の理りを聞いて、猶「のうらは六なり」とつぶやくに、ある人云出待るは、世話に、長者「代なし」(以下傍点筆者)、「こゝに、それとはいさゝか心はちがひ侍れ共、大かた。似よつたる事あり」と何の脈絡もなく、またかなり強引に「陶朱公」の故事に転換される。

中巻でのこの二つの故事来歴は、「友名」の恋愛譚というストーリーから見ると、まったく遊離しており、中巻が消失しても、『是楽物語』は成立する。中巻だけに目録が欠丁しているのも当然のことである。それに対し、この二つの咄が「下巻における展開の伏線としての働きを持っている」と読みとることはできるが、そのことを過大評価することは危険であろう。しかし、この中巻は、『是楽物語』にとっては、その成立とも関わる重みをそれとして負っている。ここで大事なことは、この故事来歴が、それぞれ菊池真一氏も考証されたように、「長恨歌抄」や「史記評林」の丸どりではあるが、たとえば「かの楊貴妃」の咄が、「とても次」に「はしめよりかたり給へ」という「聞ある人」の要請によっていることである。これは必然的に、「抑いぐさの大事は、大将の心と軍兵の心同じきとおなじからさるに、かちまけはありとかや」や、「抑此霓裳羽衣の曲と申へ、(中略)後に楊貴妃にをしへ給ふとかや」と、講釈のスタイルを意識することになった。「陶朱公」の咄でも、これが「また永く敷物がたりながら、おのゝもはなしきにて候へば、かたり申侍らん」と、聞

き手(読者層)に依拠している点を見おとしてはならない。これらの述懐が、作者の自己弁護、あるいは頼昧のポーズであるとしても、当時の一つの文芸享受のあり方を示していると見てさしつかえない。

二

『是楽物語』での故事来歴は、中巻だけではなく、上巻にも頻出する。ただ上巻では、これが名所めぐりと複合し、神社の「縁起」として語られる。ここでは、その語り手が、「あたりの人」(「目やみの地蔵」であったり、「木かげをきよめ侍る」「よしありけるおきな」(地主権現)や作者であったりするが、「是楽」が後退したわけではない。「東海道名所記」では、

いとおしき子には、旅をさせよといふ事あり。萬事思ひ知るものは、旅にまさる事なし。鄙の永路を行過ぐるるには、物うき事、うれしき事、腹の立つ事、おもしろき事、あはれる事、おそろしき事、あぶなき事、をかしき事、とりどりさまさま也。

と旅の効用を説き、「楽阿弥」を軸に「縁起」や在地の伝承などを集積したが、『是楽物語』での「湯の山くたり」は、「まづ一つは陰気ばらしたため。なぐさめがてら。有間へ御湯治あるべし。道すがら、おかしき事あまたあり」という「是楽」の発想によっている。この名所めぐりが、「竹斎」を意識したものであるこ

とは、この方法が「主従狂歌」を軸にしていることや、「誓願寺」での「むかし道外たる人の口ずさみに西方へ日々にかよふと聞からは今日も仏や御留すなるらん」からも明らかであるが、このとき『是楽物語』の周辺には、『洛陽名所集』や『京童』をはじめとする名所地誌が存在した。

ところで、この『是楽物語』の挿絵については、早く水谷不例氏が、「京童の画系」として、「仮名草子では、明暦から万治の間に刊行された『是楽物語』『保昌物語』(中略)など、同系統に属するものであらう」と指摘されているが、画風が近似しているだけではなく、次のように「清水寺」(図1・2)「大仏」(図3・4)など、ほぼ同様の構図をもっている。これは、『是楽物語』



〔図1〕『是楽物語』



〔図2〕『京童』



〔図3〕『是楽物語』



〔図4〕『京童』

と『京童』との間に何らかの交渉があったことを示している。このこともあわせて、『是楽物語』の名所めぐりを考えるとき、『京童』の序がひとつの意味を示す。

仁和寺の法師のひとり岩清水にまうでつる事のあやしく、今少年のさかしきにあいさせて、九重の外まで見めぐり、鳳闕のめでたきつくり、神社仏閣のかたちをながき、来歴をいししてよといへば、杜撰のことなりといなびながら、(中略)詞の花をかざらず、その根を求め、所々まいてとう下向めされ、とがをばいちやがおはんとたはぶれて、筆をはしらしむる。

ここに『是楽物語』の作者の意図の一つが読みとれるし、『是

楽物語』が、「神社仏閣」の「来歴」に傾斜していることも納得がいく。ただ『是楽物語』には、「詞の花をかざらず」といった姿勢がなく、それが物語としての成立を可能にしたことはいうまでもない。

『是楽物語』上巻では、目録どおり「きをんおたび所」から「ふし」までの名所が詳述されていくが、ここでの作者の意図は、次のように逆接的に示されている。

四条をひがしへゆけば、京極にあたりて、牛頭天皇の御旅所の宮居あり、友名もこゝにて下乗して、つゝしんでおがまされる、其めてのかたにあたり、古たるほこら有、所の人冠者殿とぞ申ける、いまだ、其縁起はきいはんべらねと、是楽一しゆとりあへず

さくならく太郎冠者どの、ミヤならば供する我をわきてまもれよ

この「古たるほこら」については、「縁起」は捨象されているが、これ以降「是楽」は、それぞれの寺社で「縁起」を尋ね、ときにはそれを語り、名所めぐりと狂歌とを交錯させていく。「縁起」が付加されているのは、「いづみしきぶのしるしの石」「誓願寺」「目やミの地藏」「地主権現」「耳づか」「東福寺」「いなるの明神」であるが、たとえば「耳づか」から「東福寺」への道行は、次のように構成されている。

大仏のこなたに、大なるつか有。
此いはれを聞侍れば、昔大坂の御代のとき、故大閼長鮮國

を御せめ有しとき、諸國の軍勢も発向して、かの國にて、思ひ〜に分捕高名せしを、其しるしに、くびは長せんにすてをき、耳鼻を切て飯朝して、此所につかにつき侍るとかやいへり、(中略)念仏の次に

びくのうすき人やかくなる耳づかのむかしの秋をきくぞかなしき

猶大仏にまいりて、(中略)抑此大仏の再興は、事あたらしき事ながら、故ひでより公の御いと名にて、一天下の三年のものなりを、此堂の建立につくし給ふとかや、(中略)誠に三國一の伽藍也といひ侍れば、是楽

すくひ給へ三國一の釈迦ならばわれもにあいに人の花むこ(中略)それより卅三間をおがミ、かはら屋町より本海道に出、一二のはしを打わたれば、即東福寺の門前なり。

このあと「東福寺」では、「縁起」のほかに、「虎関」の「いまだ若僧にておはしますとき」のエピソードが語られている。また、さきの「大仏」のところでは、「京もいなかもをしなべて、大仏の物がたりとたにいへば、大きな事はいぬがそんなりと思ひて、たれもつもらいなき事をいふ事、近年はやりたり、此中もある人此所にて」と「大仏」の「耳かき」の咄が付加されているが、これは次の『醒睡笑』の咄を典拠にしたものである。

昔語に、女院へある時大きな杓子をあげけることありし。御覽じ始めなれば、なにも御知りなくて、左右へ御尋ねあれども、おなじく「存ぜず」と申さるる。「さらば下種

に問へ」とおほせある時、おはしたに右のむねを尋ねらる。聞く者をかしがりて、「名を存じたる者なし」と申せば、女院のおほせあるやう、「われはこれを推した。鬼の耳掻きであらう」と。

時頼禪門

思ふべし人はすりこぎ身は杓子思ひあはぬはわれゆがむなり。(「妬心」巻之五の三)

この笑話の挿入を可能にしたのは、「三代相伝のくせもの」や「すりきり」としての「是楽」の設定と大きく関わっている。またこのことが、『是楽物語』がただの地誌にとどまっていなことのひとつの例証になる。

この名所めぐりでの「縁起」の典型は、「地主権現」である。

「是楽」が「木かげをきよめ侍る」「よしありけるおきな」に、「此権現の本地」や、「此観世音の由来」を尋ね、それに対し、「おきな」が、「抑当寺と申奉るハ、むかし宝亀九年四月の比か」と、「長々と語っていくが、ここでもそれだけに終わらず、「猶有がたく思ひしハ、ふしみの里に、年久しう此清水寺に月参りせるもの有、時もこゝそあれ五月十八日午の日の事なるに」と、「念彼観念の利益譚」が付加されている。これによっても明らかのように、この物語の作者が意図したのは、「由来」に傾斜しながらも、たんなる「昔語り」の再録ではないことがわかる。それらは、この作者のもった現実感覚の現われとみてよい。これらのことから、『是楽物語』の名所めぐりが、「竹斎」やそ

の他の地誌の模倣だけでないことが理解できる。またその創作手法の冗長・破調だけから一元的に評価することもできない。

三

「是楽」の役割は、いわば「語り部」に徹底しており、その意味で「是楽」は、作者の術学性とも等身大である。「友名」が夢を見た「二八ばかりなるすがた」の「やさしくにほひあてやかなる」女が忘れられず、「やまひのむしろ」についたときも、「是楽」は、「一もんの座にかしこまり。此度のだんなのわづらひ。其養生道理にあたり侍らねば、験気なきこそ勿論なれ。推参ながら、其要を申さん」と、「医者之道」を説く。また、このあと「友名」が、「かのゆめともわかず、うつとも覚え給ぬ、よしなし事」を語ったときも、「是楽」はすかさず、「これはこれ、たはれたるために、引べき事にし、あらねども、むかし殷の代に、高宗といひし聖王あり」と講釈を始める。そして、「もとより、すきもの事なれば。言葉に花をさかせければ」と述べられるが、これは「是楽」の本質を言いあてている。「言葉に花を咲かす」とは、「他我身の上」の「世話に、論語よみの論語よまずといふ事をいひならはせり(中略)我淫乱なる事をも、是即天地和合の道理、人倫の根本など、言葉に花をさかせて云ぬれば」(第一の七)などと、マイナスイメージもあるが、原義は、『太平記』の「大衆の立てつる処の不審、一々に言葉に花をさかせ、理

に玉を連れて答へける」(第十七「山門攻事付日吉神託事」)での「雄弁」^⑥にという意味であろう。しかし、これら「是楽」のペダント的な言辞を、作者の啓蒙の意識だけに一方的に断じることはできない。さきの中巻での「楊貴妃」物語も、「聞ある人」の要請にこたえたものであったし、「陶朱公」の故事も、「おのゝもはなしすき」であることを前提としていたように、読者との交感を不問に付すことはできない。

故事・由来への斜傾は、整版本出現の寛永期以降いつそう顕著になる。野田氏は、その間の事情を、『塵滴問答』を例にとり、天文二十四年写本と正保二年版とを比較し、その「大きな異同」^⑦「大幅の増補部分」というのが、「俗受けをねらった由来物語にな」り、それは、「この当時の啓蒙的な実用主義の風潮に乗ろうとしたためであろう」と説明されている。この時期には、たしかにおびただしい実用・啓蒙書が出版されている。たとえば、『寛文十年刊書籍目録』によっても、「盤上書」「茶湯書」「駝方附料理書」などの実用書のほか、「物の初りを記す」とあるように、『枯杭集』や『由来物語』など、物の由来を説く書が目につく。これら諸本の意図は、『由来物語』の跋文に明確に示されている。

誠にからのやまとの其書を見るに、ふくるまのふみのかずくゝあめる中に、あるひは其ころかたく、きぶき文字にて、童女のうれいおゝからんことをおもひあわし、あれこれかいあつめ口に出侍るにまかせ、そこはかたなくかきつくれれば、あやしうこそものくるほしきていになんあめる。

啓蒙教訓の姿勢を露骨にしながらも、由来だけを編集・再録するのではなく、和漢の書の「ころかたく」「きぶき文字」をやらげ「童女」に供するという。この態度は、『伽婢子』にもうかがえる。

經典の沉深なる、載籍の浩瀚なる、譬へば蠶を会して鼓するが如し。これ何の益か之れ有らん。伽婢子の書たる、言新奇を獲し、義浅近を極む。怪異の耳を驚かし滑稽の人を説しむる事、寝て得れば之れ醒め、倦て得れば之れ舒ぶ。これ庸人孺子の好みて読み、易く解する所也。(「雲樵」序)

これは、了意が「自序」でいう「学智ある人の目をよろこばしめ、耳をすくぐためせず。只兒女の聞をおどろかし」の言辞と照応するところでもある。

実用書だけではなく、『京童』『洛陽名所集』『東海道名所記』などの地誌も、故事・由来への傾斜を示しているし、他の「かな草子」の諸作でもそうである。たとえば、『薄雪物語』の「園部の衛門」と「うすゆき」との恋文で展開されたのは、「又中ごろの事なるに、横山殿と申(す)公家あり」や、「いにしへも嵯峨の天皇の御時」の咄であり、「異國にもそもじ様のやうなる無理事を仰せかけらるる、御門おはします。その臣にかんはくといふ者有り」などと「唐土」の咄もつづられた。この『薄雪物語』享受の側面に「いろいろの文見まいらせ候へば、とりどりの御ひき事おもしく候」といった要素があることも否定できないであろう。『浮世物語』でも、「博奕異見の事」(巻一の四)や、「傾城

狂ひ異見の事」(巻一の六)の前にそれぞれ「博奕の事」(巻一の三)「傾城の事」(巻一の五)と由来を先行させているし、「博奕の事」では「今は昔、博奕は唐土の烏曹といふ者、博某といふ事を仕出せしより、金銀を賭物にして勝負を決す。(中略)さる程にかの鼻涕若公の頃漸く人となり」と、「浮世房」の一代記と由来との複合をはたしている。「傾城の事」では「今は昔、傾城といふは天竺にも有り。淫肆といふは傾城のある所を言ふ。(中略)是を傾城といふ事は、前漢の武帝に李夫人を参らせし時……」などと故事が独立している。「是楽物語」での故事来歴も、もちろんそれぞれの分析や位置づけは必要であるが、これらの時好性とまったく離して考えることはできないであろう。中巻でのあの冗長な「楊貴妃」や「陶朱公」の故事も、是楽物語のストーリーの展開だけから見れば付加的なものにすぎないが、この時期に相ついで出版された『仮名列女伝』や、『見ぬ世の友』『堪忍記』などの中国説話を背景において考える必要がある。

四

「是楽物語」は、その大すじだけから見れば恋愛小説である。その点では、「お伽草子」をはじめ、「恨の介」や『薄雪物語』、『露殿物語』など中世風恋物語の系譜にあるとしてよい。しかし、水谷不倒氏は、「恐らく当時町家に発生した事件を仕組んだもの」「巷間の生々しい事件を主題」としたものとされ、「其れ故

年号を記した」のであろうし、「仮名草子の古書奥から脱して、新しき珍らしさを此作に由りて見ることが出来る」と述べられた。また野田氏も、「年月および主要人物の名が明記してあること」や、「山本友名が酒屋であったということ」に「いくらか実在らしいもの」が感じられるところから、「友名が実在の人物であったとすれば、小説の事件も実際にあった話ではないかと推測され、この小説は一つの事実小説とも考えられるのである」と仮説をたてられている。これらの諸説に対し、菊池氏は、この友名の恋愛譚の「中心部の構想が全く独自のものではなく、『竹斎狂歌物語』や狂言などをヒント」としていることを指摘され、「強いて事実小説としなくても、『是楽物語』の新しさはそれなりの評価を受ける」に値すると発言されている。たしかに、菊池氏の所説のとおり、ここでは「事実小説」であるかどうかの詮索はあまり重要ではない。「まただんなの所にまいり、旅の用意をとま／＼にしたりて、又あくる八月十一日といへるにこそ、旅のかどいてしたりけるれ」や、「折ふし今は彼岸の中日なるにや」あくれば、九月六日の東じらミに、湯の山の宿を立出れば、「それより我家にかへり給ふに、明日は九日の節句なりとて」などと月日が指定されているが、これを原事実を再現するための態度・手法とストリートに解釈できるであろうか。もし原事実の再現であるとするなら、「八月十一日」や「九月六日」などの指定は、それ以上の意味をもたないし、また、冒頭でこの物語が「明暦元年の比かとよ」と発想されていることとの矛盾を解決しなければ

ならない。むしろこの月日の指定は、「山本友名」や「久介」「きさ」「中里庄兵衛」「白河弥右衛門」など、人名の明記とも関わって、この『是楽物語』の作者の事実性を付与する一つのノンフィクション的手法であったとみてよいのではないか。人名の明記についても、「山本友名」以下が実在を感じさせる命名であればあるほど、逆に「是楽」という名の抽象性・象徴性が浮かびあがってくる。

明暦元年の比かとよ。都四条あたりに。山もとのなにがし。友名とて有徳の人のおはします。此人ハしめは。すゝミテは酒を作りて。市にうり。しりぞきては。しちなどとり侍りて。家に千金をかきねける。出入けんぞく多き中に。何がし是楽とて。三代相伝のくせものあり。たゞすりきりの名のミ、ふじの山と高く。やゝもすれは。友名のしのびあるきの御供すれバ。としもとしにこそよれ、百とせなかばのよはひをして。かゝるおとなげなき。しかたとて。猶内かたの氣にいらねバ。出入しきも。たかかりけり。されども、家に大車あるときハ。此ものならでハ。かなはざりけり。

ここでも「是楽」は、「友名」の具体的設定とは对象的に、「何がし是楽」とその正体は隠され、「三代相伝のくせもの」「すりきりの名のミ、ふじの山と高く」とする人物設定も、「竹斎」や「その余助」などと同じ域にある。「山本友名」が実在感のある設定であるなら、「是楽」は明らかに物語人物として設定されている。また、この「山本友名」「是楽」主従の設定は、「竹斎」

をはじめとする同伴者形式の踏襲である。

あめが下おだやかにして、山も動ぜず、峯の松たいらかにして、風しづかにおさまり、國家よろこびながき時とかや。そのころ山城の國に、やぶくすしの竹斎とて、きやうがる瘦法師一人あり。其身は貧苦にして、何事も心にまかせざれば、おのづから心もまめならず。肌(に)じやうゑをかざらねば、やぶくすしとて人もよばず。(中略) 又にらみの介とて郎等一人あり。(『竹斎』)

いつの比にやありけん、三河の國吉田のほとりに、その余助とて、数ならぬやせおとこ住みけり。またつねづね、たがひに訪ひなぐさみし友に、世の金無といふ者侍りける。(『ねごと草』)

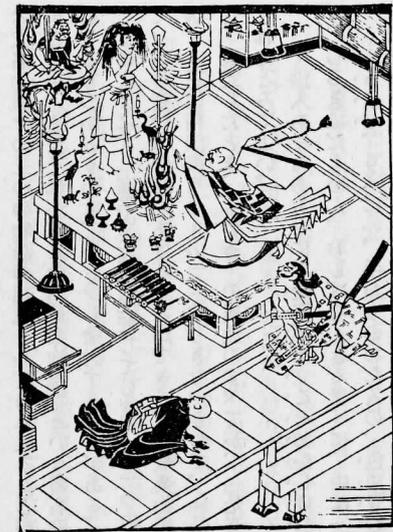
ただ、『竹斎』や『東海道名所記』などが、同伴者文芸として発想されながらも、それぞれ従の役割の「にらみの介」や、「大坂辺のなにがしが手代」の形象化が不充分であったのに対し、『是楽物語』では、事情が複雑である。一言でいうなら、表面的には、上巻では「是楽」が「主」になり、「友名」の存在が稀薄になっているが、下巻では、「友名」が「主」となり「是楽」は裏にひっこんでしまっているのである。このことについては、菊池氏の「作者の発想の基盤には『友名物語』があったが、同時に彼は『是楽物語』を企図した」という所説や、「本来なら、この小説は『山本友名物語』とでもすべき」ものであるという野田氏の意見もあるが、この主従の逆転を、機械的に『是楽物語』と『山

本友名物語』の二つの物語の相克としてとらえることが妥当なのかどうか、またそれが、この『是楽物語』という書名の由来に短絡するものかどうかは、もう少し検討する必要がある。

このように、上巻で主従が逆転してしまった一つの要因として、『竹斎』の影響をあげることができる。『是楽物語』の作者が、「三代相伝のくせもの」「すりきり」として、「是楽」を発想・設定したとき、「竹斎」の属性のすべてが、「是楽」に移入されたとみてよい。

供人あまたある中に、是楽が出立、そおかしけれ、下にハ、しろきはだもめん、おしげなくきるまゝに、中にハ、ひのゝふる合せ、うへにハ、手おりのわた入の、色めもしかと見えわかぬに、りきう時代のどしのおび、(中略)おや重代ふるかたに、九寸五分の朱ぎやのあい口、(中略)これこそ若衆のかたミとて、もやうだてなるふる扇、はくの色さへかはりは、むかし覚えあはれ也。

この「是楽」の姿に、「竹斎」の「やぶれ紙子に布裏つけ」「羽織はいかにもすすびたるに」「紙頭巾をぞかぶり」「破れ果てたる扇をさし扱鼻紙は屑紙を、ふたつに折りておし入(れ)」という姿を、オーバーラップさせてみることもできる。また、名所めぐりで、「友名」の六首に対し、「是楽」が倍以上の十四首もの狂歌をよんでいるのも、「竹斎」の属性が「友名」ではなく、「是楽」に転移したことの結果である。第二の要因は、先にも見てきたように、「是楽」が「語り部」として、作者の術学性を全



〔図5〕

面に負ったことにある。これらの要因のため、上・中巻では「是楽」が肥大化し、「主」とさえ見間違ふ存在となったわけである。それでは、下巻ではそれがどのように変化したのか。下巻になるのと、「友名」「きさ」の恋愛譚、それから「久介ふうふ」の欲心が咄の中心になるが、ここでの「是楽の役割は、基本的には上巻と変わらない。ただ「是楽うけたまはり、其日に、かの七条あたり、たづねものしければ、さる人ありて曰、かのかたへ、本武士の牢人の女にて、(中略)とかく我たのミたる人、其左右はやくきかまほしかるべきと思ひ、其まかへり侍りて右のあらまいかたり侍れば、(第一)や、(其後、是楽えんを以て、母とする人になり。始をはりの事ども、かたり侍れば、(第一)折ふしは楽かへり侍りて、此事のあらまい。おひたる母がむねのうらなど、数かずかたり侍れば、(第二)、また、「かの是楽をめされ、此事をミつだんあるに、是楽なミだをなかし、すべて、此道にふかくまよふは、儒釈道につよくいましむる所なれ共、一つ人情のうへよりゆるして(中略)まつ去ながら、此度は……」(第五)などと、ストーリーの展開のテンポにあわせ、上巻では、この後につけられていた「推参ながら、其要を申さん。(中略)まづ医者之道に四つのしな有」とか、「引べき事にしへあらねども、むかし股の代々」といった故事・由来が省略されているのである。いわば下巻では、「是楽」は狂言まわしに徹底しており、それはそれで役割を果たしている。また、本文では登場しないところでも、かゝる折節、久介が女房は、猶ふかきいきとをりをなし、

に描かれている。

五

『是楽物語』の基調にあるのは、あくまでも「友名」の恋愛譚であり、いうならこれは、『山本友名物語』である。それが『是楽物語』となつてゐるのは、「是楽」が主人公の物語という意味ではなく、「是楽」という名に仮託された享楽的感情を象徴としてすえたものである。「是楽」の名の由来については、菊池氏が「思へばく、一日の命万金よりもおもしろ、此たからをわすれて、いたづらに他をもとむるは、兼好法師が罪人也」(上巻・第五)の条が、「作者の人生観を示すものとして重要」と考えられ、貞享五年刊の『徒然草諸抄大成』の注に着目、「是楽物語」の作者は、『孔聖全書』あるいは『孔子家語』を見ていたのではなからうか、「是楽」という命名は多分この辺から出たものではなかつたか」と推測されたが示唆深い。『孔子家語』については、寛永十五年には和刻本が出されているし、寛文無刊記『和書籍目録』にも、冊数は五冊となつてゐるが、「外典」のところに「孔子家語」の書名が見える。

孔子遊於泰山見樂声期。(略)行乎郊之野鹿裘帶索鼓琴而歌。孔子問曰。先生所爲以爲樂者何也。期對曰。吾樂甚多。而至者三。天生萬物。唯人爲貴。吾既得爲人。是一樂也。男女之別。男尊女卑。故人以男爲貴。吾既得爲男。是

洛中の神祇をどうかし奉り、此思ひものを、のらひ侍りけるこそおそろしけれ。(中略)友名公、高僧貴僧請し、冥仏靈社に奉幣をなし侍り、まことをつくしていのられへ。有がたや、其しるしに、生りやうだんにあらはれ出、さまく口にほりて、やがて怨霊は去にけり(第六)

とする場面の挿絵(図五)で、「生りやう」と対峙しているのは「是楽」であり、上巻から読みつづけてきても、下巻でまったく姿を消すわけでもなく、それほどの断絶感・不自然さは与えない。挿絵でいえば、最後で「きさ」が「変成男子のすがた」となり、「友名をはじめ、同本妻、是楽、同じく山のかみ、(中略)以上廿二人」の夢に出てくるところでも、「是楽」は「友名」の横

二、楽也。人生有不見三日月免襪者。吾既以行年九十五矣。是三、楽也。貧者士之常。死者人之終。處常得終當何憂哉。孔子曰。善哉能自覺者也。

「是楽」命名の発想にこの逸話が関わった可能性はある。しかし、「是楽」に仮託されたのはこれだけではない。「是楽」の本質は、「友名」の養生について、「あまりくすりのミにてせめたる分にては、平癒せんと存じ候はず、それがしが愚按にハ、(中略)遊山翫水に心を御のばしなされ侍るやうにして」など、「たはれたる事」を言うところにもうかがえる。有馬への道行きも、「陰気ばらし」にすぎなかったし、「是楽」の「山の神」が喝破したように、「ゑやうぐるひの相伴せんはかり事」であった。

「是楽」の享楽性は、「江口の里」で、謡曲『江口』を下敷にした「西行法師、此所にて一夜の宿をかりけるを、思ひ出も、かりの世を、いとふ心のいと深き、遊女あそふ舟子とも、うたへやうたへ、うたかたの、あはれうき世のなぐさ」と、人をすゝめ我をなぐさめ」という詞章に典型的にあらわれている。また、「是楽」は、「いなりの明神」で、「抑此明神は、(中略)諸國交易の商人をも、まもり給ふと聞侍れば、それがしこそ遊民なれ、我おひの小商をもせるため」というように「遊民」である。「遊民」とは、『浮世物語』に、「世に捨てられたる余者なり」(巻第三の二)とあるほか、『可笑記』でも、「むかしきる人の云るは、それ天下にたからおおくありといへども、人をもつて第一とす、人の中にも士農工商の四民を以てたからとす(中略)此外の者は遊

民とて何の用にもたず、たゞ鼠のごとし」(巻二)と詳述されている。しかし、近世初期文芸での「遊民」は「是楽」だけではなかった。「竹斎」をはじめ、「その余助」や「世の金無」「浮世房」など、みな「遊民」であった。それは、「遊民」であることによつて、享楽性や自在性をもつてきたからではないか。

先にも述べたが、『是楽物語』に原事実が存在したかどうかはあまり重要ではない。冒頭で「明暦元年の比か」と語りだされ、「かの亡者があとを、いよく念比にとふらへは、亡者もゆめに見えたるに、たがふ所なく、家はん昌の守りとなり。末はんじやうと聞ける、ふじきにも、有がたくもおかしうも有、世のためし也」と結ばれるその構図は、この咄が「ゆめ」を契機とし、「ゆめ」で終わることも関わって、あくまでも「物語」の手法であることを示している。この末文は、『恨の介』での「上人出でさせ給ひ、御回向。げにありがたき印導かな。(中略)極楽世界も是やらん。かの人々は目前に、西の白雲と天にあがらせ給ふ事、いやありがたしとも中々に、申(す)ばかりはなかりけり。これを見る人聞く人の、上古も今も末代も、ためし少き事ぞとて、感ぜぬ人はなかりけり」に照応するし、こういった文末の教訓的言辭は、ほかに、『七人比丘尼』などにもちらん、『伽婢子』所収の説話(巻二の二・巻三の二・巻三の三ほか)などにも見られるものである。しかし、ここで大事なことは、「友名」の恋愛譚が「ふじきにも、有がたくもおかしうも有」咄として発想された

ことである。そのとき、もし原事実が存在したとしても、それはもう物語の仮構性の中にとりこまれていく。その仮構を語るとき、享楽性と自在性をもつた「是楽」が創造されたのである。

注① 水田潤氏「竹斎」の成立」(『仮名草子の世界』桜楓社、昭和五十六年六月二十日)。

② 田中伸氏「仮名草子の複合性と系列立てへの試論」(『仮名草子の研究』桜楓社、昭和四十九年六月十五日)。

③ 「第六章『是楽物語』論」(『近世初期小説論』笠間選書91、昭和53年4月30日)。

④ 菊池真一氏「『是楽物語』の世界」(『國語と國文學』、昭和五十六年十一月)。

⑤ 『是楽物語』論」(『國語と國文學』、昭和五十五年八月)。

⑥ 『古版小説挿絵史』(大岡山書店、昭和十年四月十日)。

⑦ 土井忠生氏他編訳邦訳『日葡辞書』(岩波書店、一九八〇年5月29日)。

⑧ 「仮名草子雜記」(③に同じ)。

⑨ 『新撰列伝体小説史前編』(春陽堂・昭和四年七月廿三日)。

⑩ ③に同じ。

⑪ ⑤に同じ。

⑫ ⑤に同じ。

⑬ ⑤に同じ。

⑭ 「是楽」と明記してあるのは十一首であるが、作者と一体化している四首のうち三首を「是楽」のものとした。なお「是楽」は、有馬でも一首よんでいる。

⑮ ④に同じ。

⑯ 京都風月宗智刊本『孔子家語』(長澤規矩也編『和刻本諸子大成』第一輯、汲古書院、昭和五十年七月)。

(まえしば・けんいち 橘女子高等学校教諭)